

Title	大阪外国語大学論集 37 編集後記
Author(s)	
Citation	大阪外国語大学論集. 37 p.369-p.369
Issue Date	2007-09-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80046
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

編集後記

母校 85 年の歴史を振り返り、その刊行物をリスト化して残そうという話が出て、大内一先生（スペイン語）、竹原新先生（ペルシア語）と打ち合わせ、学生諸君と入力作業を開始したのが春先のこと、途中、国際シンポジウムのパンフレット作成など別の仕事に追われながらも、何とかなるだろうと高を括っていた。だがその「高」は予想以上の数にのぼった。

ある程度入力を終えたと安心して、未整理のものはないかと再点検したところ、埋もれていた刊行物がダンボール三箱に溢れるほど見つかった。すでに蟬時雨の響く季節で、その後は時間と戦いながら入力に明け暮れることとなった。

それでもなんとか入力作業を終えることができたのは、快く刊行物を貸してくださった大阪外国語大学付属図書館の職員の皆様や各専攻の先生方、そして入力作業に携わってくれた学生諸君のおかげである。図書館では特に林道代さん、小原薫さん、藤本郁子さんのご協力を得た。また入力作業では、小松久恵先生（本学非常勤講師）、泰地啓司君（国際関係専攻〔ウルドゥー語〕3 年）、中村悠君（ウルドゥー語専攻 3 年）、川中浩司君（ウルドゥー語専攻 2 年）、中西要人君（ヒンディー語専攻 2 年）、森土卓磨君（ウルドゥー語専攻 1 年）、が継続的に入力作業を担当してくれた。夏季休暇の数日間、集中的に協力してくださったのは、竹原新先生、高橋陽子さん（大学院博士後期課程 3 年）、木下侑里子さん（大阪大学大学院人間科学研究所 M1 年）、安達順子さん（ペルシア語専攻 4 年）、嶋崎日登美さん（ペルシア語専攻 4 年）、北裏龍太さん（言語情報専攻〔ペルシア語〕3 年）、斉藤美穂さん（日本語専攻〔ペルシア語〕3 年）、白井麻友子さん（ペルシア語専攻 3 年）、田端友香さん（ペルシア語専攻 3 年）、中井真奈さん（ペルシア語専攻 3 年）、法山美華さん（ペルシア語専攻 3 年）、緒方遥香さん（ペルシア語専攻 2 年）、下司誠子さん（ペルシア語専攻 2 年）、西村公美さん（ペルシア語専攻 2 年）、廣出衣見佳さん（ペルシア語専攻 2 年）、舟木俊平君（ペルシア語専攻 2 年）、山口哲平君（言語情報専攻〔ウルドゥー語〕4 年）、廣瀬拓人君（ウルドゥー語専攻 1 年）、森野雄介君（ウルドゥー語専攻 1 年）の皆さんである。井本恭子先生（イタリア語）、竹村景子先生（スワヒリ語）は、ご自身の所属専攻が刊行している雑誌の由来について、文章で懇切にお知らせくださった。個人所蔵や研究室所蔵の刊行物を探してくださった先生や、問い合わせのメールに対し丁寧にご教示くださった先生、入力作業中の研究室まで多くの刊行物をお持ちくださった先生もおられた。古谷大輔先生（研究推進室長代理）には、編集や写真撮影などさまざまな点でご助言をいただいた。表紙写真には刊行物を並べたが、その中の論集には「最終号」と小さく文字を加えてみた。刊行にあたっては、研究推進室編集委員会および研究協力係の塚上公昭氏、奥山行高氏にも大変お世話になった。まずはここで皆様に御礼申し上げたい。ありがとうございました。

入力作業中には、その文章に惹かれ、手を休めて読んでしまうことがしばしばあった。戦前の雑誌『鵬翼』、『朔風』、『印度洋』などは、専攻語関係者のみならず、日本の現代史にとっても貴重な資料であろう。『鵬翼』では戦死した学生への追悼文が目を引く。『朔風』の表紙題字は内藤湖南であり、当時の日本の対アジア外交の一端が看取できる。また戦争中にあっても、中国語、モンゴル語、ヒンディー語、英語、スペイン語などの古典に触れ、学ぼうとした足跡は、外語人の気概を感じた。戦後の社会主義への傾倒、学生による自主的な刊行や、専攻単位での紀要や横断的な研究会誌の刊行、学内学会誌や学術研究叢書、語学教材シリーズの刊行や書籍出版など、大阪外国語大学における研究活動の歩みは、日本の学術研究活動の歴史を見事に反映している。

ここに所収できた刊行物は 80 年分、9200 余点にのぼった。主な収蔵先は、大阪外国語大学付属図書館と、各専攻研究室である。入手不能の刊行物を含めると 1 万部を軽く上回るであろう点数は、単純に計算して、毎年 100 点以上の論文等が大学から刊行されていたことを示している。小規模な単科大学ではあるが、わが国の教育・研究に少なからず貢献してきたことを、誇らしく思う。国内で研究成果を発表する場が限られていた諸言語に関する研究成果や教材は、本学の刊行助成や、個人研究費で刊行されてきた。また海外作品の翻訳や、『The Reeds』のような、日本の文学作品の英訳作品は、単行本で刊行しても相当数にのぼる量になっている。本リストは大学からの刊行物であり、学外の学術誌、新聞、雑誌、書籍などに掲載されたものを含めると、数万点以上の研究成果が本学および本学に関係した研究者によって刊行されたことになる。本リストにある論文同様、学外の刊行物もまた多様な分野にわたり、多くの貴重な研究成果がある。たとえば本学教員による辞書類は、わが国の学界において多大な功績を残していることは言を俟たない。入力作業は、門前の小僧である筆者にさえも、そのようなことに思いを馳せる時間を与えて呉れた。

「あ、この先生、昨日エレベーターで一緒でした」

前日入力した論文の著者と一緒になった学生が嬉しそうに話す。

「ああ、とうとう見送ったよ」

編年で入力していると、同じ著者に何度も出会う。入力中の学生達はその著者に親しみをもつようになり、その著者の退官記念論集に出くわすと、作業中に送別の言葉を口にした。

誤字脱字等がないように配慮したが、入力ミス等の不備は作業を担当した筆者の責である。また入力ソフトの活用にも慣れであったため、リストの並べ方を工夫できなかった点を申し訳なく思う。どうかご海容の上、大阪外国語大学における研究の歴史を楽しんでいただきたい。そして、これらの研究成果を財産に、今後もさらなる研究成果が発表されることをご期待いただきたい。

平成 19 年 9 月 5 日

入力担当 S Y 記